今月号はさすがに、大震災に取材した作が多かった。第十一首まで震災の歌を採らせてもらった。

風景にみどりの色が抜けている　暮らしのすべてが破片となって　鈴木陽美

テレビ映像に映ったすさまじい風景に取材した作では、この作に注目。みどりが消えたという発見、日常生活の崩壊を「破片となる」と表現した感覚。するどい。

大丈夫と言っているのに　東京の放射線値のニュースのつづく　駒田晶子

大丈夫と言っているのにどこか信用できない。小さな子供を持ち、福島に両親をはじめ多くの知人がいる作者に、フクシマ原発は他人事ではない。そんな思いか。

テレビでは言えない話がどれくらいあるのでしょうかネットに潜る　木村俊介

テレビ・新聞といった既成メディアの劣化が言われて久しいが、今回はとくに原発事故の報道に関してそのひどさが大いに話題になった。大問題を軽くうたって成功。

大き身の谷川健一先生のかくれし姿おもい浮かぶも　晋樹隆彦

「揺れの最中は机の下に隠れたと九十翁のそっとつぶやく」という作と並んでいる。古代研究者、地名研究者として有名な谷川健一さんである。電話で話をしたのだろう。谷川さんを知っている人はもちろん、知らない読者にも、ユーモラスな映像が読める点が持ち味。

短歌の現在

No.371　今月の15首を読む

佐佐木幸綱

水、電気、ガス止まりたるを言ふわれに「津波と原発」と夫は苛立つ　大口玲子

地震直後の夫婦の会話に取材した作。作者の住所は仙台市若林区。新聞社に勤める夫は、社会的責任と紙面の見出しが頭に浮かぶのである。「公」・「私」二つの見方の対比をきわだたせた表現に注目。

滅ぶかもしれぬ世界にわれはゐて小さき人形作りて眠る　野原亜莉子

「原発」と「人形」の対比がショッキングだ。「日本は強い！」などという空虚なコマーシャルが、ひっきりなしにテレビで流される日々である。「滅ぶかもしれぬ世界」というペシミスティックな世界観が、かえって新鮮にひびく。

ガスの香の漂う路地を進みおり男女二列の隊崩れつつ　田中拓也

避難場所に向かう生徒を引率してゆく場面のようだ。生徒と一緒の場合、教員には責任がある。個人で災害現場に居合わせるのとはちがう。大口の歌の評で言った「公」である。

茨城県もかなりの地震被害があったと聞く。水戸駅は崩壊状態で、何日も列車が不通だった。ここは水戸市内だろうか。上句、不安な空気を表現して、的確。

水欲しい、下着足りない、被災者の声が聞こえるこのドイツまで　小野フェラー雅美

情報化社会というがまさに地球規模で、震災・原発爆